

野のはくちょう

DE VILDE SVANER

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

ここからは、はるかな国、冬がくるとつばめがとんで行くとい国に、ひとりの王さまがありました。王さまには十一人のむすこと、エリーザというむすめがありました。十一人の男のきょうだいたちは、みんな王子で、胸に星のしるしをつけ、腰に剣をつるして、学校にかよいました。金のせきばんの上に、ダイヤモンドの石^{せきひつ}筆で字をかいて、本でよんだことは、そばからあんしゅうしました。

この男の子たちが王子だということは、たれにもすぐわかりました。いもうとのエリーザは、鏡ガラスのちいさな腰掛に腰をかけて、ねだんにしたらこの王国の半分ぐらいもねうちのある絵本

をみていました。

ああ、このこどもたちはまったくしあわせでした。でもものごととはいつでもおなじようにはいかないものです。

この国のこらずの王さまであつたおとうさまは、わるいお妃きさきぎと結婚なさいました。このお妃がまるでこどもたちをかわいがらないことは、もうはじめであつたその日からわかりました。ご殿じゆうこそつて、たいそうなお祝の宴会がありました。こどもたちは「お客さまごっこ」をしてあそんでいました。でも、いつもしていたように、こどもたちはお菓子や焼きりんごをたくさんいただくことができませんでした。そのかわりにお茶わんのなかに砂を入れて、それをごちそうにしておあそびといいつけられました。



その次の週には、お妃はちいぢやないもうと姫のエリーザを、いなかへ連れていって、お百姓の夫婦にあずけました。そうしてまもなくお妃はかえつて来て、こんどは王子たちのことでいろいろありもしないことを、王さまにいいつけました。王さまも、それでもう王子たちをおかまいにならなくなりました。

「どこの世界へでもとんでいって、おまえたち、じぶんでたべていくがいい。」と、わるいお妃はいいました。「声のでない大きな鳥にでもなつて、とんでいっておしまい。」

でも、さすがにお妃ののろつたほどのひどいことにも、なりませんでした。王子たちは十一羽のみごとな野のはくちよう白鳥はくちようになったのです。きみようななき声をたてて、このはくちようたちは、ご

殿の窓をぬけて、おにわを越して、森を越して、とんでいってしまいました。

さて、夜のすつかり明けきらないまえ、はくちようたちは、妹のエリーザが、百姓家のへやのなかで眠っているところへ来ました。ここまできて、はくちようたちは屋根の上をとびまわって、ながい首をまげて、羽根をばたばたやりました。でも、たれもその声をきいたものもなければ、その姿をみたものもありませんでした。はくちようたちは、しかたがないので、また、どこまでもとんでいきました。上へ上へと、雲のなかまでとんでいきました。とおくとおく、ひろい世界のはてまでもとんでいきました。やがて、海ばたまでずつとつづいている大きなくらい森のなかまでも、

はいつていきました。

かわいそうに、ちいさいエリーザは百姓家のひと間にまぼつねんとひとりでいて、ほかになにもおもちゃにするものがありませんでしたから、一枚の青い葉ツばをおもちゃにしてみました。そして、葉のなかに孔あなをぼつんとあけて、その孔からお日さまをのぞきました。それはおにいさまたちのすんだきれいな目をみるような気がしました。あたたかいお日さまがほおにあたるたんびに、おにいさまたちがこれまでにしてくれた、のこらずのせつぷんをおもい出しました。

きょうもきのうのように、毎日、毎日、すぎていきました。家のぐるりのいけ垣を吹いて、風がおおつていくとき、風はそつと

ばらにむかつてささやきました。

「おまえさんたちよりも、もつときれいなものがあるかしら。」
けれどもばらは首をふって、

「エリーザがいますよ。」とこたえました。

それからこのうちのおばあさんは、日曜日にはエリーザのへやの戸口に立って、さんび歌の本を読みました。そのとき、風は本のページをめくりながら、本にむかつて、

「おまえさんたちよりも、もつと信心ぶかいものがあるかしら。」
といいました。するとさんび歌の本が、

「エリーザがいますよ。」とこたえました。そうしてばらの花やさんび歌の本のいったことはほんとうのことでした。

このむすめが十五になったとき、またご殿にかえることになっていました。けれどお妃はエリーザのほんとうにうつくしい姿をみると、もうねたましくも、にくらしくもなりました。いつそおにいさんたち同様、野のはくちょうにかえてしまいたいとおもいました。けれども王さまが王女にあいたいというものですから、さすがにすぐとはそれをするこゝもできずにいました。

朝早く、お妃はきさきお湯にはいりにいきます。お湯殿は大理石でできていて、やわらかなしとねと、それこそ目がさめるようにりっぱな敷物がそなえてありました。そのとき、お妃はどこからか三びき、ひきがえるをつかまえてきて、それをだいて、ほおずりしてやりながら、まずはじめのひきがえるにこういいました。

「エリーザがお湯にはいりに来たら、あたまの上のつておやり。そうすると、あの子はおまえのようなばかになるだろうよ——。」

それから二ひきめのひきがえるにむかつて、こういいました。

「あの子のひたいのつておやり、そうするとあの子は、おまえのようなみつともない顔になって、もう、おとうさまにだって見分けがつかなくなるだろうよ——。」

それから、三びきめのひきがえるにささやきました。

「あの子の胸の上のつておやり。そうすると、あの子にわるい性根しょうねがうつつて、そのためくるしいめにあうだろうよ。」

こういって、お妃は、三びきのひきがえるを、きれいなお湯のなかにはなしますと、お湯は、たちまち、どろんとしたみどり色

にかわりました。そこでエリーザをよんで、着物をぬがせて、お湯のなかにはいらせました。エリーザがお湯につかりますと、一ぴきのひきがえるは髪の上のにりました。二ひきめのひきがえるはひたいの上のにりました。三ひきめのひきがえるは胸の上のにりました。けれどもエリーザはそれに気がつかないようでした。やがて、エリーザがお湯から上がると、すぐあとにまっかなけしの花が三りん、ぽっかり水の上に浮いていました。このひきがえるどもが、毒虫でなかったなら、そうしてあの魔女の妃がほおずりしておかなかつたら、それは赤いばらの花にかわるところでした。でも、毒があつても、ほおずりしておいても、とにかくひきがえるが花になったのは、むすめのあたまやひたいや胸の上への

ったおかげでした。このむすめはあんまり心がよすぎて、罪がなさすぎて、とても魔法の力にはおよばなかつたのです。

どこまでもいじのわるいお妃は、それをみると、こんどはエリーザのからだをくるみの汁でこすりました。それはこの王女を土色によごすためでした。そうして顔にいやなにおいのする油をぬつて、うつくしい髪のもも、もじやもじやにふりみださせました。これでもう、あのかわいらしいエリーザのおもかげは、どこにもみられなくなりました。

ですから、おとうさまは王女をみると、すっかりおどろいてしまいました。そうして、こんなものはむすめではないといいました。もうたれも見分けるものはありません。知っているのは、裏

庭にねている犬と、のきのつばめだけでしたが、これはなんにもものはいえない、かわいいそうな鳥けものどもでした。

そのとき、かわいそうなエリーザは、泣きながら、のこらずいなくなってしまうたおにいさまたちのことをかながえだしました。みるもいたいたしいようすで、エリーザは、お城から、そつとぬけだしました。野といわず、沢といわず、まる一日あるきつづけ、とうとう、大きな森にでました。じぶんでもどこへ行くつもりなのかわかりません。ただもうがっかりしてつかれきって、おにいさまたちのゆくえを知りたいとばかりおもっていました。きつとおにいさまたちも、じぶんと同様に、どこかの世界にほうり

だされてしまったのだろう、どうかしてゆくえをさがして、めぐり逢いたいものだとおもいました。

ほんのしばらくいるうちに、森のなかはもうとつぷり暮れて、夜になりました。まるで道がわからなくなってしまうので、エリーザはやわらかな苔こけの上に横になって、晩のお祈をとなえながら、一本の木の株にあたまを寄せかけました。あたりはしんとしずまりかえって、おだやかな空気につつまれていました。草のなかにも草の上にも、なん百とないほたるが、みどり色の火にいた光をぴかぴかさせていました。ちよいとかるく一本の枝に手をさわっても、この夜ひかる虫は、ながれ星のようにばらばらと落ちて来ました。

ひと晩じゆう、エリーザは、おにいさまたちのことを夢にみました。みんなはまだむかしのとおりのこども同士で、金のせきばんの上にはダイヤモンドの石筆で字をかいいたり、王国の半分もねうちのあるりっぱな絵本をみたりしていました。でも、せきばんの上にかいているものは、いつもの零れいや線ではありません。みんながしてきた、りっぱな行いや、みんながみたりおぼえたりしたいろいろのことでした。それから、絵本のなかのものは、なにかも生きていて、小鳥たちは歌をうたうし、いろんな人が本からぬけてでて来て、エリーザやおにいさまたちと話をしました。でもページをめくるとぬけだしたものは、すぐまたもとへとんでかえっていきますから、こんざつしてさわぐというようなことはあり

ませんでした。

エリーザが目をさましたとき、お日さまは、もうとうに高い空にのぼっていました。でも高い木立が、あたまの上で枝をいっばいひろげていましたから、それをみることができませんでした。ただ光が金の紗きんしやのきれを織るように、上からちらちら落ちて来て、若いみどりの草のにおいがぷんとかおりました。小鳥たちは肩のうえにすれすれにとまるようにしました。水のしやあしやあながれる音もきこえました。これはこのへんにたくさんの泉があつて、みんな底にきれいな砂のみえているみずうみのなかへながれこんでいくのです。みずうみはふかいやぶにかこまれていましたが、そのうち一箇所いっしよに、しかが大きなではいり口をこしらえました。

エリーザはそこからぬけて、みずうみのふちまでいきました。みずうみはほんとうにあかるくきれいにすみきつていて、風がやぶや木の枝をふいてうごかさなければ、そこにうつる影は、まるで、みずうみの底にかいてある絵のようにみえました。

そこには一枚一枚の葉が、それはお日さまが上から照っているときでも、かげになつているときでも、おなじようにはつきりとうつつて、すんでみえました。

エリーザは水に顔をうつしてみて、びつくりしました。それは土色をしたみにくい顔でした。でも水で手をぬらして、目やひたいをこすりますと、まっ白なはだがまたかがやきだしました。そこで着物をぬいで、きれいな水のなかにはいっていききました。も

うこのむすめよりうつくしい王さまのむすめは、この世界にふたりとはありませんでした。それから、また着物を着て、ながい髪の毛をもとのように編んでから、こんどはそこにふきだしている泉のところへいつて、手のひらに水をうけてのみました。それからまた、どこへいくというあてもなしに、森のなかをさらに奥ぶかく、さまよいあるきました。エリーザはなつかしいおにいさまたちのことをかながえました。けっしておみすてにならない神さまのこともおもいました。ほんとうに神さまは、そこへ野生のりんごの木をならせて、空腹をしのがせてくださいました。神さまはエリーザに、なかでもいっぱいなたりんごの実のおもみで、しなっている木をおみせになりました。そこでエリーザはたつぷ

りおひるをすませて、りんごのしなつた枝につつかい棒をかつてやりました。それからまた、森のいちばん暗い奥の奥にはいつていききました。それはじつにしずかで、あるいて行くじぶんの足音もきこえるくらいでしたし、足の下で枯れツ葉のかさこそくずれる音もきこえました。一羽の鳥の姿もみえませんでした。ひとすじの日の光も暗い木立のなかからさしこんでは来ませんでした。高い樹の幹が押しあつてならんでいて、まえをみると、まるで垣根がいくえにも結ばれているような気がしました。ああ、これこそうまれてまだ知らなかつたさびしさでした。

すつかりくらい夜になりました。もう一ぴきのほたるも草のなかに光つてはいませんでした。わびしいおもいでエリーザは横に

なつて眠りました。すると、木木の枝があたまの上で分かれて、そのあいだから、やさしい神さまの目が、空のうえからみておいでになるようにおもいました。そうして、そのおつむりのへんに、またはお腕のあいだから、かわいらしい天使がのぞいているようにおもわれました。

朝になつても、ほんとうに朝になつたのか、夢をみているのか、わかりませんでした。エリーザはふた足三足いきますと、むこうからひとりのおばあさんが、かごのなかに木いちごを入れてもつてくるのであいました。

おばあさんは木いちごをふたつ三つだしてくれました。エリーザはおばあさんに、十一人の王子が馬にのつて、森のなかを通つ

ていかなかつたかとたずねました。

「いいえ。」と、おばあさんがこたえました。「だが、きのう、あたしは十一羽のはくちょうが、めいめいあたまに金のかんむりをのせて、すぐそばの川でおよいでいるところをみましたよ。」

そこで、おばあさんはエリーザをつれて、すこしさきの坂になったところまで案内しました。その坂の下にちいさな川がうねつてながれていました。その川のふちには、木立こたちが長い葉のしげつた枝と枝とおたがいにかわしていました。しぜんのままにのびただけでは、葉がまざり合うまになれないところには、木の根が、地のなかから裂けてでて、枝とをからまり合いながら、水の上にたれていました。

エリーザはおばあさんに「さようなら」をいうと、ながれについて、この川口が広い海へながれ出している所まで下つていきました。

大きなすばらしい海が、むすめの目のまえにあらわれました。けれどひとつの帆もそのおもてにみえてはいませんでした。いっそうの小舟もそのうえにうかんではいませんでした。どうしてそれからさきへすすみましょう。王女は、浜のうえに、数しらずころがっている小石をながめました。水がその小石をどれもまるくすりへらしていました。ガラスでも、鉄くずでも、石でも、そこらにあるものは、王女のやわらかな手よりもつとやわらかな水のために、かたちをかえられていました。

「波はあきずに巻きかえっている。それで堅いものでもいつかすべっこくなる。わたしもそのとおりあきずにいつまでもやりましよう。あとからあとからきれいに寄せてくる波よ。おまえにいいことを教えてもらってよ。なんだかいつか、おまえたちのおかげでおにいさまたちのところへつれて行ってもらえるような気がするわ。」

うちよせられた海草の上に、白いはくちようの羽根が十一枚のこっついていました。それをエリーザは花たばにしてあつめました。その羽根の上には、水のしずくがたれていました。それは露の玉か、涙のしずくかわかりません。浜の上はいかにもさびしいものでした。けれど大海のけしきが、いつときもおなじようではなく、

しじゅうそれからそれとかわるので、さほどさびしいともかんじませんでした。それは二三時間のあいだに、おだやかな陸にかこまれた内海が一年かかってするよりも、もつとたくさんの変化をみせました。するうち、まつくろな大きな雲がでて来ました。海も「おれだつてむずかしい顔をするぞ。」というようにおもわれしました。やがて風が吹きだして、波が白い横腹をうえに向けました。でも雲がまつ赤にかがやきだして、風がぴつたりとまると、海はばらの花びらのようにみえました。それからまた青くなったり白くなったりしました。でもいかほど海がおだやかにないでも、やはり浜辺にはいつもさざなみがゆれていました。海の水はねむっているこどもの胸のように、やさしくふくれあがりました。

お日さまがちょうどしずもうとしたとき、十一羽の野のはくちょうが、めいめいあたまに金のかんむりをのせて、おかのほうへとんでくるところをエリーザはみました。一羽また一羽と、あとからあとから行儀よくつづいてくるのでそれはただひとすじながくしろい帯をひいてとるようにみえました。そのときエリーザは坂にあがって、そつとやぶかげにかくれました。はくちょうたちは、すぐそのそばへおりて来て、大きな白いつばさをばたばたやりました。いよいよお日さまが海のなかにしずんでしまうと、とたんに、はくちょうの羽根がぱったりおちて、十一人のりっぱな王子たちが、エリーザのおにいさまたちが、そこに立ちました。エリーザはおもわず、あつと大きなさけび声をたてました。それ

はおにいさまたちはずいぶん、せんとかわっていました。けれど、やはりそれにちがいないことが、すぐとわかったからでした。そこでみんなの腕のなかにとびこんでいって、ひとりひとり、名まえをよびました。王子たちは、そうして王女がまたでて来たのを見て、それはもうせいも高くなり、きりようもずっとうつくしくなつてはいましたけれど、じぶんたちのいもうとということがわかって、いいようもなくうれしくおもいました。みんなは泣いたりわらったりしました、そうして、こんどのおかあさまが、きょうだいのこらずに、どんなにひどいことをしたか、おたがいの話でやがてわかりました。

「ぼくたちきょうだいはね、」と、いちばん上のおにいさまがい

いました。「みんな、お日さまが空にでているあいだ、はくちょうになつてとびまわるが、お日さまがしずむといっしょに、また人間のかたちにかえるのだよ。だから、しじゅう気をつけて、お日さまがしずむころまでには、どこかに、かならず足を休める場所をみつけておかなければならないのさ。それをしないで、うかうか雲のほうへとんで行けば、たちまち人間とかわつて、海の底へしずまなければならぬのだよ。わたしたちはここに住んでい

るのではない。海のむこうに、ここと同様、きれいな国がある。でもそこまでいく道はとて長くて、ひろい海のうえをわたつていかなければならない。その途中には夜をあかす島もない。ただちいさな岩がひとつ海のなかにつきでているだけだ。でもどうや



ら、そこにはみんながくつつき合つてすわるだけのひろさはある。海が荒れているときには、波がかぶさつてくるが、それでも、その岩のあるのがどのくらいありがたいかshれない。そこでぼくたち、夜だけ、人間のかたちになつて明かすのだからね。まったくこの岩でもなかつたら、ぼくたちは、好きなふるさとへかえることができないだろう。なにしろ、そこまでいくのは一年のなかでもいちばん長い日を、二日分とばなければならぬのだからね。一年にたつたいっぺん、ふるさとの国をたずねることがゆるさされている。そうして、十一日のあいだここにとどまつていて、この大きな森のうえをとびまわる。まあ、この森のうえから、ぼくたちのうまれたおとうさまの御殿もみえるし、おかあさまのうめら

れていらつしやるお寺の塔もみえるというわけさ。——だからこのあたりのものは、やぶでも木立こたちでも、ぼくたちの親類のようにおもわれる。ここでは野馬がこどものじぶんみたとおり草原をはしりまわっている。炭焼までが、ぼくたちがむかし、そのふしにあわせておどつたとおりの歌をいまでもうたう。ここにぼくたちのうまれた国があるのだ。どうしてもここへぼくたちは心がひかれるのだ。そうしてここへ来たおかげで、とうとう、かわいいもうとのおまえをみつけたのだ。もう二日、ぼくたちはここにいらることができる。それからまた海をわたってむこうのうつくしい国へいかなければならない。けれどもそこはぼくたちのうまれた国ではないのだ。でもどうしたらおまえをつれていけようね。ぼ

くたちには船もないし、ボートもないのだからね。」

「どうしたらわたしは、おにいさんたちをたすけて、もとの姿にかえして上げることができようね。」と、いもうともいいました。こうしてきょうだいは、ひと晩じゆう話をして、ほんの二、三時間うとうとしただけでした。

エリーザはふと、あたまの上ではくちよの翼がばさばさ鳴る音で目がさめました。きょうだいたちはまた姿を変えられています。やがてみんなは大きな輪をつくってとんでいきました。けれどもそのなかでひとり、いちばん年下のおにいさまだけが、あとのこつていました。そのはくちようは、あたまを、いもうとのひざのうえにのせていました。こうして、まる一日、ふたりは

いっしょになっていました。夕方になると、ほかのおにいさまたちがかえって来ました。やがて、お日さまがしずむと、みんなまたあたりまえのすがたにかえりました。

「あしたはここからとんでいって、こんどはまる一年たつまでかえってくることはできない。でもおまえをこのままここへおくことはどうしたってできない。おまえ、わたしたちといっしょに行く勇氣があるかい。わたしたち、腕一本でも、おまえをかかえてこの森を越すだけの力はある。だからみんなのつばさを合わせたら、海のうえをはこんでわたれないことはなからう。」

「ええ、ぜひつれていってください。」と、エリーザはいいました。

そこでひと晩じゆうかかって、みんなしてよくしなうかわやなぎの木の皮と、強いあしとで網を織りました。それは大きくて丈夫にできました。この網のうえにエリーザは横になりました。やがてお日さまがのぼると、おにいさまたちははくちょうのすがたに変わって、てんでんくちばしで網のさきをくわえました。そうして、まだすやすやねむっている、かわいいいもうとをのせたまま、雲のうえたかくとんでいきました。ちようどお日さまの光が顔にあたるものですから、一羽のはくちようは、いもうとのあたまのうえでとんでやって、その大きなたばさでかげをこしらえてやりました。――

やがてエリーザが目をさましたじぶんには、もうずいぶんとお

くへ来ていました。エリーザはまるで夢をみているような気持ちでした。空を通つて、海を越えて、高くはこばれて行くということが、どんなにふしぎにおもわれたことでしょう。すぐそばには、おいしそうにじゆくしたいちごの実をつけたひと枝と、いいかおりのする木の根がひと束たばおいてありました。それらはあのいちばん年の若いおにいさまが、取つて来てくれたものでした。いもうとはそのおにいさまのはくちようをみつけて、下からにつこり、うれしそうにわらいかけました。あたまの上をとんで、つばさでかげをつくつていてくれるのも、このおにいさまでした。

もうすいぶん高くとんで、はじめ下でみつけた大きな船は、いつか白いかもめのように、ぼつとり水のうえに浮いていました。

ひとかたまりの大きな雲が、すぐうしろにぬつとあらわれましたが、それはどこからみても、ほんとうの山でした。その雲の山に、エリーザはじぶんの影や十一羽のはくちょうの影がうつるのを見ました。みんな、それこそ見上げるような大きな鳥になってとんでいました。まったくくみたこともないすばらしい影でした。でもお日さまがずんずん高くのぼって、雲がずつとうしろに取りのこされると、その影のようにかんでいる絵が消えてなくなりました。

まる一日、はくちょうたちは、空のなかを、かぶら矢のようになつてとびつづけました。

でもなにしろ、いもうとひとりつれているのですから、おくれ

がちで、いつものようにはとべません。するうち、いやなお天気になって来て、夕暮もせまって来ました。エリーザはしずみかけているお日さまをながめて、まだ海のなかにさびしく立っている岩というのが目にはいらぬものですから、心配そうな顔をしていました。はくちようたちがよけいはげしく羽ばたきしはじめたようにおもわれました。ああ、おにいさまたちみんなが、おもいきって早くとぶこともできないのは、エリーザのためだったのです。やがてお日さまがしずむと、みんなは人間にかえって滝のなかに落ちておぼれなければなりません。そのとき、エリーザはころの底から、お祈りのことばをとなえました。でもまだ岩はみつきりません。まっくろな雲がむくむく近よって来ました。やがて

それは大きなきみわるく黒い雲の山になって、まるで、鉛のかたまりがころがつてくるようでした。ぴかりぴかりいなづま稲妻が、しきりなしに光りだして来ました。

いよいよお日さまが海のきわまで落ちかけて来ました。エリーザの胸は、わなわなふるえました。そのときはくちようたちは、まっしぐらに、まるで、さかさになって落ちくだるいきおいでおりて行きました。はっとおもうとたん、またふと浮きあがりしました。お日さまは、半分もう水の下にかくれました。でも、そのときはじめて目の下に小さい岩を見つけました。それはあざらしというけものはこんなものかとおもわれるほどの大きさで、水のうえにちよっぴり顔をだしていました。お日さまはみるみる沈んで

いきました。とうとうそれがほんの星ぐらいにちいさくみえたと
き、エリーザの足はしつかりと大地につきました。

お日さまは紙きれが燃えきれて、さいごにのこった火花のよう
にみえてふと消えてしまいました。おにいさまたちは、手を取り
あつてエリーザのまわりに立っていました。でも、それだけしか
場所はなかつたのです。波はたえず岩にぶつかつて、しぶきのよ
うにエリーザのあたまにふりそそぎました。空はしつきりなしに
あかあかともえる火で光つて、ごろごろ、ごろごろ、たえず音が
して、かみなりはなりつづきました。でも、きようだいおたがい
にしつかりと手を取りあつて、さんび歌をうたいますと、それが
なぐさめにもなり、げんきもついて来ました。

明け方のうすあかりでみると、空気はすみきつて風もおだやかでした。お日さまがのぼるとすぐ、はくちようたちはエリーザをつれて、この島をぱつとどび立ちました。海はまだすごい波が立っていました。やがて高く舞り上がって、下をみると、こんじよう紺青の海のうえに立つ白いあわは、なん百万と知れないはくちようが、水のうえでおよいでいるようでした。

お日さまがいよいよ高く高くのぼったとき、エリーザは目のまえに、山ばかりの国が半分空のうえに浮いているのをみつけました。その山のいただきには、まつしろに光る氷のかたまりがそびえ、そのまんやかに、なんマイルもあろうとおもわれるお城が立

つていて、そのまわりにきらびやかな柱がいくつもいくつもならんでいました。エリーザはこれがみんなのいこうとする国なのかとたずねました。けれどはくちようたちは首をふりました。なぜというにエリーザの今みたのは、しんきろうといつてりっぱに見えても、それはたえずかわっている雲のお城で、人のいけるところではなかつたのです。なるほどエリーザがみつめているうちに、山も林もお城もくずれてしまつて、そのかわりに、こんどは、どれもおなじようなりっぱなお寺が、二十も高い塔やとがった窓をならべていました。なんだかそこからオルガンがひびいてくるよくな気がしましたが、でもそれは海鳴りの音をききちがえたものでした。やがてお寺のすぐそばまでいきますと、みるみるそれは

艦隊になつて、海をわたつていきました。でもよくながめると、それもただ海の上を霧がはつていただけでした。そんなふうにしじゅう目のまえにかわつたまぼろしを見ながらとんでいくうちに、とうとう目ざすほんものの国をみつめました。そこには、うつくしい青い山がそびえて、すぎ林が茂つて、町もあり、お城もありました。お日さまがまだ高いうちに、大きなほら穴のまえの岩のうえにおりました。そこにはやわらかなみどり色のつる草が、縫いとりした壁かけのようにつくしくからんでいました。

「さあ、ここで、今夜はおまえもどんな夢をみるだろうね。」と、末のおにいさまがいつて、いもうとのねべやをみせてくれました。「どうか、神さまが夢で、どうしたらおにいさまたちをすくつて、

もとの姿にかえしてあげられるかおしえてくださるといいのですわ——。」と、いもうとはこたえました。

このかんがえが、しつきりなし、エリーザの心にはたらいていました。それでエリーザは神さまのお助けを熱心にいのりました。それはねむっているあいだもいのりつづけました。するうち、エリーザはたかく空のうえに舞い上がって、しんきろうの雲のお城までもとんでいったようにおもいました。すると、うつくしいかがやくような妖ようじよ女がひとり、おむかえにでて来ました。ところでその妖女が、あの森のなかでいちごの実をくれて、金のかんむりをあたまにのせたはくちようの話をしてくれたおばあさんによくにっていました。

「おにいさまたちは、もとの姿にもどれるだろうよ。」と、その妖ようじよ女はいいました。「でも、おまえさんにそこまでの勇氣と辛抱があるかい。ほんとうに、水はおまえのきやしやな手よりもやわらかだ。けれどもあのとおり石のかたちを変える。でもそれをするには、おまえさんの指がかんじるような痛みをかんじるわけではない。あれには心がない。おまえさんがこらえなければならぬような苦しみをうけることもない。だからおまえさん、そら、あたしが手に持っているイラクサをごらん。こういう草はおまえさんが眠っているほら穴のぐるりにもたくさん生えているのだよ。その草と、お寺の墓地に生えているイラクサだけがいまおまえさんの役に立つのだからね。それは、おまえさんの手をひどく刺し

て、火ぶくれにするほど痛かろうけれど、がまんして摘みとらなければならぬだよ。そのイラクサをおまえさんの足で踏みちぎって、それを麻のかわりにして、それでおまえさんは長いそでのついたくさりかたびらを十一枚編まなければならぬ。そうしてそれを十一羽のはくちように投げかければ、それで魔法はやぶれるのだよ。でもよくおぼえておいでなさい。おまえさんがそのしごとをはじめたときから、それができ上がるまで、それはなん年かかろうとも、そのあいだ、ちつとも口をきいてはならないのですよ。おまえさんの口から出たはじめてのことばが、もうすぐおにいさまたちの胸を短刀のかわりにさすだろう。あの人たちのいのちは、おまえさんの舌しだいなのだ。それをみんなしつかりと

心にとめておぼえておいでなさいよ。」

こういつて、ようじよ妖女はエリーザの手をイラクサでさわりました。それはもえる火のようにあつかつたので、エリーザはびくりとして目がさめました。すると、もう、そとはかんかんあかるいまひるでした。ねむっていたすぐそばに、夢のなかでみたとおなじようなイラクサが生えていました。エリーザはひざについて、神さまにお礼のお祈をしました。それからほら穴をでて、しごとにかかりました。

エリーザはきやしやな手で、いやらしいイラクサのなかをさぐりました。草は火のようにあつく、エリーザの腕をも手首をも、やけどするほどひどく刺しました。けれどもそれでおにいさままた

ちをすくうことができるなら、よろこんで痛みをこらえようともいえました。それからつみ取ったイラクサをはだしでふみちぎつて、みどり色の麻をそれから取りました。

お日さまがしずむと、おにいさまたちはかえって来ました。いもうとがおしになったのをみて、みんなびっくりしました。これもわるいまま母がかわった魔法をかけたのだろうとおもいました。でも、いもうとの手をみて、じぶんたちのためにしてくれているのだとわかると、末のおにいさまは泣きました。このおにいさまの涙のしずくが落ちると、もう痛みがなくなつて、手の上のやけどのあとも消えてしまいました。

エリーザは夜もせつせと仕事にかかっていました。もうおにい

さまたちをすくいだすまでは、いつときもおちつけけないのです。そのあくる日も一日、はくちようたちがよそへとんで行っているあいだ、エリーザはひとりぼっちのこつていました。けれどこのごろのように時間の早くたつことはありません。もうくさりかたびらは一枚でき上がりしました。こんどは二枚目にかかるところで

す。

そのとき^{りよう}獵のつの笛が山のなかできこえました。エリーザはおびえてしまいました。そのうちつの笛の音はずんずん近くなつて、獵犬のほえる声もきこえました。エリーザはおどおどしながら、ほら穴のなかになげこんで、あつめてとつておいたイラクサをひと束にたばねて、その上に腰をかけていました。

まもなく、大きな犬が一匹き、やぶのなかからとび出して来ました。それから二匹き、三匹きとつづいてとび出して来て、やかましくほえたてました。いったんかけもどつてはまたかけ出して来ました。そのすぐあとから、獵のしたくをした武士たちが、のこらずほら穴のまえにいらびました。そのなかでいちばんりっぱなようすをした人が、この国の王さまでした。王さまはエリーザのほうへつかつかとすすんで来ました。王さまはうまれてまだ、こんなうつくしいむすめをみたことがなかったのです。

「かわいらしい子だね。どうしてこんなところへ来ているの。」と、王さまはおたずねになりました。

エリーザは首をふりました。口をきいてはたいへんです。おに

いさまたちがすぐわれなくなつて、おまけにいのちをうしなわなければなりません。そうして、エリーザは両手を前掛の下にかくしました。痛めている手を王さまにみられまいとしたのです。

「わたしといっしょにおいで。」と、王さまはいいました。「おまえはこんなところにいる人ではない。おまえの顔がうつくしいように、心もやさしいむすめだったら、わたしはおまえにびろうどと絹の着物をきせて、金のかんむりをあたまにのせてあげよう。そうして、おまえは世にもりっぱなわたしのお城に住んで、この国の女王になるのだよ。」

こういって、王さまはエリーザを、じぶんの馬のうえにのせました。エリーザは泣いて両手をもみました。けれども王さまはこ

うおっしやるだけでした。

「わたしは、ただおまえの幸福をのぞんでいるだけだ。いつかおまえはわたしに礼をいうようになるう。」

それで、じぶんのまえにエリーザをのせたまま、王さまは山のなかを馬でかけていきました。武士たちも、すぐそのあとにつづいてかけていきました。

お日さまがしずんだとき、うつくしい王さまの都が目のおまえにあらわれました。お寺や塔がたくさんそこにならんでいました。やがて、王さまはエリーザをつれてお城にかえりました。

その高い大理石の大広間には、大きな噴水がふきだしていました。壁と天てんじょう井には目のさめるような絵がかざってありまし

た。けれども、エリーザにそんなものは目にはいりませんでした。ただ泣いて、泣いて、せつながつてばかりいました。そうしてただ、召使の女たちにされるままに、お妃さまの着る服を着せられ、髪に真しんじゆ珠の飾をつけて、やけどだらけの指に絹の手袋をはめました。

エリーザがすっかりつぱにしたくができて、そこにあらわれますと、それは目のくらむようなくさくさでしたから、お城の役人たちは、ひとしおていねいにあたまをさげました。そこで王さまは、エリーザをお妃きさきに立てようと思いました、そのなかでひとり、この国の坊さまたちのかしらの大僧だいそうじょう正が首をふつて、このきれいな森のむすめはきつと魔女で、王さまの目をくらまし、



心を迷わせているにちがいないとささやきました。

けれども王さまはそのことばには耳をかしませんでした。もうすぐにおいしいの音楽をはじめよとおいいつけになりました。第一等のりっぱなお料理をこしらえさせて、よりぬきのきれいなむすめたちに踊らせました。そうして、エリーザは、香りの高い花園をぬけて、きらびやかな広間に案内されました。けれどもそのくちびるにも、その目にも、ほほえみのかげもありませんでした。ただそこには、まるでかなしみの涙ばかりが、世世にうけついで来たままこりかたまって、いつまでもながくはなれないとでもいうようでした。そのとき王さまは、エリーザを休ませるためことに用意させた、そばのちいさいへやの戸を開きました。このへや

は、高価なみどり色のかべかけでかぎってあつて、しかも今までエリーザのいたほら穴とそつくりおなじような作りでした。ゆかの上にはイラクサから紡つむい麻あさ束たばがおいてありました。天てん井じようにはしあげのすんだくさりかたびらがぶらさがつていました。これはみんな、武士のひとりが、めずらしがって持ちはこんで来たものでした。

「さあ、これでおまえはもとのすまいにかえつた夢でもみるかい。」と、王さまはおつしやいました。「ほら、これがおまえのしかけていたしごとだ。そこでいま、このうつくしいりっぱなものづくめのなかにおいて、むかしのことをかんがえるのもたのしみであろう。」

エリーザはしじゅう心にかかっている、この品じなをみますと、
ついほほえみがくちびるにのぼって来て、赤い血がぽおつとほお
を染めました。エリーザはおにいさまたちをすくうことを心にお
もいながら、王さまの手にくちびるをつけました。王さまはエリ
ーザを胸にだき寄せました。そうして、のこらずのお寺の鐘をな
らさせて、ご婚礼のお祝のあることを知らせました。森から来た
おしのむすめは、こうしてこの国の女王になりました。

そのとき だいそうじょう 大僧正は、王さまに不吉な ふきつ ことばをささやきまし
た。けれどもそれは王さまの心の中へまでははいりませんでした。
結婚の式はぶじにあげられることになりました。しかも大僧正み
ずからの手で金のかんむりをお妃の きさき あたまにのせなければなりま

せんでした。いじのわるい、にくみの心で、大僧正はわざとあた
まに合わないちいさな輪をむりにはめ込んだので、お妃はひたい
がいたんでなりませんでした。でも、それよりもつとおもたい
輪がお妃の心にくびり込んでなれません。それはおにいさまた
ちをいたましくおもう心でした。それにくらべては、からだの痛
みなどはまるでかんじないくらいでした。ただひと言、ことばを
口にだしても、おにいさまたちの命にかかわることでしたから、
くちびるはかたくむすんで、あくまでおしをつづけました。でも
その目は、やさしい、りっぱな王さまをこのましくおもってみて
いました。王さまはエリーザのためには、どんなことでもなさい
ました。それでエリーザも、一日、一日と、日がたつにしたがつ

て、ありったけの心をかたむけて、王さまをだいじにするようになりしました。ああ、それを口にだして王さまにうちあけることができたなら、そして心のかなしみをかたることができたら、どんなにうれしいことでしょう。けれどいまは、どこまでもおしでいなければなりません。おしのまままでいて、しごとをしあげなければなりません。ですから、夜になると、王さまのおそばからそつとぬけ出して、あのほら穴のようにかざりつけた小べやにはいつてくさりかたびらを、一枚一枚編みました。けれどいよいよ七枚めにかかったとき、麻糸がつきてしまいました。

エリーザは、お寺の墓地へいけば、イラクサの生はえていることを知っていました。けれどそれには、じぶんでいつてつんでこな

ければならないのです。どうしてそこまででていきましよう。

「ああ、わたしの心にいだけ苦しみくらべては、指の痛みぐらいなんだろう。」と、エリーザはおもいました。「わたしはどうしたってそれをしなければならぬ。そうすれば神さまのおたすけがきつとあるにちがいない。」

それこそまるでなにか悪事でもくわだてているように、胸をふるわせながら、エリーザは月夜の晩、そつとお庭へぬけだして、長い並木道なみきみちをとおつて、さびしい通をいくつかぬけて、お寺の墓地へでていきました。すると、そのいちばん大きな墓石の上に、血を吸う女鬼のむれがすわっているのをみつけました。このいやらしい魔物どもは、水でもあびるしたくのように、ぼろぼろ

の着物をぬいでいました。やがて骨ばった指で、あたらしいお墓にながいつめをかけました。そうして餓鬼がきのように、死がいのまわりにあつまつて、肉をちぎつてたべました。エリーザはそのすぐそばをとおつていかなければなりません。すると女鬼どもは、おそろしい目でにらみつけました。けれども心のなかでお祈しながら、エリーザは燃えるイラクサをあつめて、それをもつてお城へかえりました。

このときただひとり、エリーザをみていたものがありました。それはれいの大僧正だいそうじょうでした。この坊さんは、ほかのひとたちのねむつているときに、ひとり目をさましているのです。そこで今夜のことをみとどけたうえは、いよいよじぶんのかんがえが正

しかつたとおもいました。こんなことはお妃きさきたるものすべきことではない。女はたしかに魔女だったのだ。だからああして王さまと人民を迷わしたのだと、かんがえました。

お寺の懺悔ざんげ座で、大僧正は王さまに、じぶんの見たことと、おもっていることを話しました。ひどいのろいのことばが、大僧正の口からはきだされると、お寺のなかの昔のお上しょうにん人たちの像が首をふりました。それがもし口をきいたら、「そうではないぞ、エリーザに罪はないのだぞ。」と、いいたいところでしたらう。けれども大僧正はそれを、まるでちがったいみにとりました。——あべこべに、それこそエリーザに罪のあるしよこで、その罪をにくめばこそ、あのとおり首をふっているのだとおもいまし

た。そのとき、ふた粒まで大粒の涙が、王さまのほおをこぼれ落ちました。王さまは、はじめ、うたがいの心をもつてお城にかえりました。どうして落ちついてねむるところではありません。はたしてエリーザがそつと起きあがるところをみつけました。それから毎晩、おなじことをしました。そのたびにそつと、あとをつけていって、エリーザがれのほら穴のへやに姿をかくしてしまふところをみとけました。

日一日と、王さまの顔はくらく、くらくになりました。エリーザはそれをみつけて、それがなぜかわけはわかりませんが、心配でなりません。そのうえ、きょうだいたちのことを心のなかでおもつて苦しんでいました。エリーザのあつい涙は、お妃の着

るびろうどと紫むらさきぎぬ絹ぬいの服のうえにながれて、ダイヤモンドのよ
うにかがやいてみえました。そのりっぱなよそおいをみるものは、
たれもお妃になりたいとうらやみました。そうこうするうちに、
エリーザのしごともいつしかあがっていきました。あとたった一
枚のくさりかたびらが出来かけのままにだけでした。一本の
イラクサももうのこっていませんでした。そこでもういちど、行
きおさめにお寺の墓地へ行って、ほんのひとつかみの草をぬいて
こなければなりません。さすがにエリーザも、ひとりぼっちくら
やみのなかをいくことと、あのおそろしい魔物に出あうことをか
んがえると、心がおくれました。けれども神さまにたよる信心の
かたいように、エリーザの決心はあくまでもかたいものでした。

エリーザはでかけていきました。ところで、王さまと大僧正もそのあとをつけて行きました。ふたりは、エリーザが格子門こうしもんをぬけて、墓地のなかへ消えていくところをみました。そばへ寄つてみますと、血を吸う魔物どもが、エリーザが見たとおりに墓石のうえにのっていました。王さまはそのなかまにエリーザがいるようにおもつて、ぎよつとしました。ついその夕方までも、そのお妃がじぶんの胸にいたことをおもいだしたからです。

「さばきは人民にまかせよう。」と、王さまはいいました。そこで、人民は、「エリーザを火あぶりの刑に処する。」と、いう宣告を下しました。目のさめるようなりっぱな王宮の広間から、くらい、じめじめした穴蔵のろうやへエリーザは押し込められまし

た。風は鉄格子の窓からびゅうびゅう吹き込みました。今までの
びろうどや絹のかわりに、エリーザのあつめたイラクサの束たばがほ
おりこまれました。その上にエリーザはあたまをのせることをゆ
るされました。エリーザの編んだ、かたいとげで燃えるようなく
さりかたびらが、羽根ぶとんと夜着になりました。けれどエリー
ザにとつて、それよりうれしいおくりものはありません。エリー
ザはまたしごとをつづけながらお祈をしました。そとでは、町の
悪太郎どもが、わるくちの歌をうたっていました。たれひとりだ
つて、やさしいことばをかけるものはありませんでした。

ところが、夕方になって、鉄格子のちかくにはくちょうの羽ば
たきがきこえました。これはいちばん末のおにいさまでした。お

にいさまはいもうとをみつ付けてくれました。いもうとはうれしまぎれに声をあげて、すすり泣きました。そのくせ、心のなかではもうほどなく夜になれば、この世のみおさめだとおもっていました。でも、しごとはもうひといきでしあがります。おにいさまたちはしかもそこへ来ているのです。

大僧正は王さまと約束して、おわりるときまで、エリーザのそばについていることにしました。それで、このときそばへ寄って来て、そのことをいうと、エリーザは首をふって、目つきと身ぶりとで、どうかでていってもらいたいとたのみました。今夜こそしごとをしあげてしまおう。それでなければせつかくいままにながしたなみだも、苦しみも、ねむらない夜を明かしたことも、

みんなむだになつてしまふのです。大僧正はいじのわるい、のろいのことばをのこしてでていきました。でもエリーザはじぶんなんの罪もないことを知っていました。そこでかまわずしごとをつづけました。

ちいさなハツカネズミが、ちよろちよろゆかの上をかけまわつて、イラクサを足のところまでひいてきてくれました。エリーザのお手つだいをしてくれるつもりでした。すると、ツグミも窓の格子こうしの所にとまって、ひとばんじゆう、一生けんめい、おもしろい歌をうたつて、気をおとさないようにとはげましてくれました。

まだそとは、夜明けまえのうすあかりでした。もう一時間たた

なければ、お日さまはのぼらないでしょう。そのとき、十一人のきょうだいは、お城の門のところへ来て、王さまにお目どおりねがいたいとたのみました。けれどもまだ夜があけないのだから、そんなことはできないといわれました。王さまはねむっていらっしやる、それをおさまたげしてはならないのだというのです。それでもきょうだいはたのんだり、おどかしたりしました。近衛このえの兵隊がでて来ました。いや、そのうちに王さままででておいでになつて、どういうわけかとおたずねになりました。するともう、きょうだいたちの姿はみえませんでした。ただ十一羽の野のはくちょうが、お城の上をとびかけて行きました。

人民たちがのこらず町の門にあつまつて来て、魔女の焼きころ

されるところをみようとひしめきあいました。よぼよぼのやせ馬が一頭、罪人ののる馬車をひいてきました。やがてエリーザはそまつな麻の着物を着せられました。あのうつくしい髪の毛は、きれいな首筋にみだれたまま下がっていました。ほおは死人のように青ざめていました。くちびるはかすかにうごいていました。そのくせ指はまだみどり色の麻をせっせと編んでいました。いよいよ死刑になりに行く道みちも、やりかけたしごとをやめようとはしませんでした。十枚のくさりかたびらは足の下にありました。いま十一枚目をこしらえているところなのです。人民たちはあつまつて来て、口ぐちにあざけりました。

「見ろ、魔女がなにかぶつぶついつている。さんびかの本ももつ

ていやしない。どうして、まだいやな魔法をやっているのだ。あんなもの、ばらばらにひき裂いてしまえ。」

こういつて、みんなひしひしとそばへ寄つて来て、くさりかたびらを引き裂こうとしました。そのとき、十一羽の野のはくちようがさあつとまいおりました。馬車のうえにとまつて、エリーザをかこんで、つばさをばたばたやりました。すると群衆はおどろいてあとへ引ききました。

「あれは天のおさとしだ。きつとあの女には罪はないのだ。」とおおぜいのものがささやきました。けれど、たれもそれを大きな声ではつきりといいきるものはありませんでした。

そのとき、役人が来て、エリーザの手をおさえました。そこで、

エリーザはあわてて、十一枚のくさりかたびらをはくちようたちのうえになげかけました。すると、すぐ十一人のりっぱな王子が、すつとそこに立ちました。けれどいちばん末のおにいさまだけは片手なくって、そのかわりにはくちようの羽根をつけていました。それはくさりかたびらの片そでが足りなかったからでした。もうひといきで、みんなでき上がらなかつたのです。

「さあ、もうものがいえませう。」と、エリーザはいいました。

「わたくしに罪はございません。」

すると、いま目の前におこつた出来事を見た人民たちはとうとうお上人さまのまえでするように、いつせいにうやうやしくあたまを下げました。けれどもエリーザは死んだものようになって、

おにいさまたちの腕にたおれかかりました。これまでの張りつめた心と、ながいあいだの苦しみが、ここでいちどにきいて来たのです。

「そうです。エリーザに罪はありません。」と、いちばんうえのおにいさまがいました。

そこで、このおにいさまは、これまでであったことをのこらず話しました。話しているあいだに、なん百万というばらの花びらがいちどににおいだしたような香りが、ぷんぷん立ちました。仕置柱のまえにつみあげた火あぶりの薪に、一本一本根が生えて、枝がでて、花を咲かせたのでございます。そこには赤いばらの花をいっばいつけた生垣が、高く大きくゆいまわされて、そのいちば

んうえに、星のようにかがやく白い花が一りん吹いていました。その花を王さまはつみとつて、エリーザの胸にのせました。するとエリーザはふと目をさまして、心のなかは平和と幸福とでいっぱいになりました。

そのとき、のこらずのお寺の鐘がひとりでに鳴りだしました。小鳥たちがたくさんかたまつてとんで来ました。それから、それはどんな王さまもついみたこともないようなさかなお祝の行列が、お城にむかって練^ねつていきました。



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

野のはくちょう

DE VILDE SVANER

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>